

天守台穴蔵石垣背面調査について

<調査の前提>

特別史跡名古屋城跡においては、現在城内石垣の調査を進めており、その保存の考え方を取りまとめる計画である。そのうち、城内全体の石垣に先行して現況把握の調査を行っている天守台石垣については、その保存方針を取りまとめた。

保存の考え方を整理する中では、近世以来の姿をとどめる石垣の保存の考え方に加え、廃城期以降に改変された石垣の取り扱いについても整理する必要があるが、天守台の穴蔵石垣については、これまでの現況調査により、根石付近は近世期の旧状をとどめている部分がある一方、現在目視できる範囲の大半が戦後積み直しされていることを確認している。

天守台石垣の保存・整備の考え方を整理する上では、名古屋城全体の石垣保存の考え方と整合させつつ、穴蔵石垣の保存整備の考え方を検討することが不可欠であり、穴蔵石垣の背面構造を踏まえた現況を正確に把握することが現時点での優先課題である。

また、そうした検討を進める中で、天守台石垣における戦後の工事状況等を確認したが、かなり大規模に工事の影響が及んでいることを確認したため、そのことの石垣に対する影響を早急に把握する必要性が生じた。

以上のように、天守台石垣の保存・修復の考え方を取りまとめるための検討材料とするため、穴蔵石垣の背面の現況をできるだけ正確に把握するための発掘調査を実施する。

○調査の目的

穴蔵石垣の今後の修復・整備の方針検討のため石垣の現況を把握する

ア) 遺構（近世期栗石等）の残存状況の確認

イ) 現在の石垣の安定性の確認（戦後の工事の影響確認）

○安全面への配慮

調査にあたっては、換気を適切に行うこと、また戦後工事の残材の適切な処理、掘削した石材や調査区内の石材の管理、調査区内での栗石層崩落防止など、安全に実施することに細心の注意を払う。

小天守については、作業スペースが限られ円滑に調査することが困難で、目標の達成も難しいことが予想されるため、今回は調査対象とせず、大天守のみを対象とする。

○具体的な目標

既存の天守閣が存在する状態で行う調査のため、調査面積、方法などに種々の制約はあるものの、次に示す具体的な調査目標を果たすことはできるものとする。

ア) 遺構の残存状況の確認

- ・近代以降に改変されず、近世の遺構が残存している可能性があるところで実施。各石垣面の中央部は、内外面ともに改変を受けており、遺構が残っている可能性は低いため、隅角部に近いところで実施。
- ・平面的に掘り下げ、栗石の違いなどに注意して、改変範囲の特定に努める。原則として範囲の確認までで、近世の遺構は掘削しない。

イ) 現在の石垣の安定性の確認

- ・比較的広い範囲で表土（表層）を除去し、昭和期の工事で行った仮設工事の痕跡の範囲を確認する
- ・安全な範囲で掘り下げ（0.8m程度）、その範囲での改変状況を確認する
- ・天端付近の築石の控え長（可能であれば穴蔵石垣及び外部石垣）を確認し、これまでレーザー探査で推測してきた数値の検証を行う。あわせて築石の角度を確認する。その際、築石に影響を与えない範囲で栗石を掘削する。
- ・石垣の安定性に影響を与える栗石について、現況を正確に把握するため、適切な場所を選定し、密度試験（水置換法）、粒度分布測定（100石程度）を行う。

○調査区の設定について

大天守閣内部で、①～③の3つの調査区を設定する。それぞれの調査区の意図、具体的な調査内容、調査方法は次の表の通り。

| 調査区 | 調査目標 | 調査内容・方法 |
|--|---|---|
| 調査区① (5m×3m) | <ul style="list-style-type: none"> ・遺構の残存の可能性があるため、その範囲の確認 ・築石控え長、角度確認 | <ul style="list-style-type: none"> ・設定したトレンチ内を、安全な勾配にて掘削。平面的に掘り下げ、攪乱のプラン把握を行う。掘削深さは概ね0.8m。 ・戦後工事部分で栗石密度試験、粒度分布測定 ・天端付近築石の控え長測定（レーダー探査のデータと対比）、角度の確認 |
| 調査区② (表層除去範囲 8m×3m、掘削 範囲 4m×3m) | <ul style="list-style-type: none"> ・石垣の安定性を検討するため、戦後の仮設物などの範囲確認 ・一部を深く掘り下げ、遺構の残存状況（攪乱の深さ）を推定 ・築石控え長、角度確認 | <ul style="list-style-type: none"> ・調査区全体について、表土（表層）を除去し、戦後工事の仮設物の範囲確認。その後、一部を掘り下げ、戦後工事の攪乱の深さを検討 ・栗石があれば、密度試験（水置換法）、粒度分布測定 ・天端石の控え長測定（レーダー探査のデータと対比）、角度の確認 |
| 調査区③ (5m×3m) | <ul style="list-style-type: none"> ・遺構の残存の可能性があるため、その範囲を確認する ・築石控え長、角度確認 | <ul style="list-style-type: none"> ・設定したトレンチ内を、安全な勾配にて掘削。平面的に掘り下げ、攪乱のプラン把握を行う。掘削深は概ね0.8m。 ・戦後工事部分で栗石密度試験、粒度分布測定 ・天端石の控え長測定（レーダー探査のデータと対比）、角度の確認 |

○掘削方法

原則として人力により行い、除去した廃材等と石材を区別して仮置きする。やむを得ず小型機器を用いる際は、振動等に細心の注意を払う。

安全面の配慮と、遺構の保全には細心の注意を払って実施する。

○埋め戻し

調査終了後は、掘削した土、石材により原状に復旧する。廃材等は別途処理することとし、その分は必要に応じて、別途用意する石材に置き換える。

○調査・掘削のイメージ

5 頁に示したイメージ図参照。

調査区②については、調査範囲全体にわたって表土（表層）を除去し、その除去した範囲の一部を、攪乱の深さ（近世遺構の残存状況）を確認するために掘り下げる。

○課題

小天守穴蔵石垣は、調査環境が悪く、現時点での調査を控えたほうが良いと判断したため、背面の現況把握ができない。

穴蔵石垣の背面状況をより確実に把握するためには、築石を外すなど、本格的な調査が必要となるが、現時点では実施が困難である。

いずれも、条件が整った際に本格的な調査を実施して確認したい。

天守台穴蔵石垣背面調査（イメージ）について



